

# 図書館通信 —79—

1987. 3

## 本を探す「道しるべ」

教養部長 田 嶋 久

「いま、何を读んでいる？」私が学生だった頃、こんな質問をよく先輩から受けたものだった。その時读んでいる本をあげると、すぐ「彼（著者）の考えをどう思う？」という質問が続いてくる。「まだ读みはじめたばかりだから」と逃げるのが精一杯だったことを思い出す。すると先輩は、その本についての感想をながながと話しだし、まだ十分に读んでいない時には、それを聞くのが苦痛だったり、先を读み進む興味を引きおこされたりしたものだった。

自分の读んでいる本を、いつも先輩が读んでいるとは限らない。先輩は、「读んだことないなあ」と言いながら、その本の著者や出版社、それに本の内容について、こまごまと尋ねてくる。数日もたつと先輩は、いつどこで读んでしまったのか、その本についての感想をしゃべりまくる。誰かが「おもしろいぞ」と言うと、その本を读んでおかねばならないような気にさせられたものだった。こうしたことが、先輩や友人のなかに読む本についての一種の流行を生みだしたりする。

本当に自分が読むべき本を選び出すことはむずかしい。同世代の間の読書に関する情報交換は、自分と本とのめぐり合いの貴重な道しるべであったと思う。

少し専門的な分野になると、講義中での文献紹介が実に貴重であった。しかし、学生時代には、先生にたくさんの文献をあげられても、その貴重さがわからなかった。膨大な文献が、その先生の苦心の研究歴の一部を示すものであることがわかったのは、だいぶ後の事であったように思う。それは、自分の力では、とうてい集めることの困難な貴重な文献リストであり、大切に残しておけばと、今になって思うのである。

私の本の読み方も、いろいろであった。どんな本を読んだらよいかを探るため、本を途中から数

ページ読んでみて、興味が持てるようだったら、座り直して、はじめから読みなおすことも多かった。本屋での立ち読みをするには、時間がかかりすぎるので、図書館の本は使うのが便利だった。一度にたくさんの本を借りて、ほとんどの本は、数ページしか読まずに返却してしまっている。

また、つぎつぎに本を读みとばして、何か分かったような気になっている時には、時間をかけてノートを取りながら読むようにしてみた。こういう読み方は、読書会、いまでいう自主ゼミで習慣づけられた。要点を書き取ったノートを読み直して、さらにもとの本に返ると、自分のノートがいかに貧しいものに思えることが多かったが、それだけ自分の身についたのだろう。

いまずぐ読む本ではないが、自分の興味を持っていることについての本、読もうとする本を買って積んでおくようになった。本は絶版になって、入手が困難になるので、集めておく必要があった。テーマ別に集めた本が多くなると、さらにその問題についての興味が高まるが多かった。しかし、読みたい本を全部買うわけにはいかない。そこで便利なのは図書館であることによく気がついた。「どの大学にも図書館があるのは、このためだったか」と妙に感心したのを思い出す。

しかし、図書館には、貴重な本が膨大にありすぎて、なかなか目指す本にたどり着くことができない。そこで、これから読もうと思う本のリストを苦心して作って、はじめて膨大な図書館の本を探る「自分の道しるべ」ができたように思う。

本を読むためには、まず、どんな本を読むかを自分で探らねばならない。その方法は、人によってさまざまであろう。学生諸君もぜひ「自分の方法」を作り出して欲しいと思っている。

## 貸し出し方法変更のお知らせ

図書館業務のコンピュータ化にともない、4月から、図書の館外貸し出しの方法が、大幅に変更となります。

1. 「館外貸出証」が中止され、新たに「図書館利用票」が出来ました。

従来の「館外貸出証」のかわりに、下図のような「図書館利用票」を使うようになります。

3月31日に図書の貸し出しをしていない利用者の「館外貸出票」は、その日をもって、また、貸し出し中の利用者のものは、図書が返却された時点をもって失効となります。その時以降、運用係カウンターに申し出れば、いつでも、「図書館利用票」の交付が受けられます。その場合、身分を確認できるもの（「学生証」か「館外貸出証」が望ましい）をお持ち下さい。写真はいりません。

2. 「図書館利用票」は、大切に扱ってください。

「図書館利用票」の四角い窓の中にある数字を、OCRリーダーで読み取ることによって、貸し出しの手続きを行います。開架図書の場合、ブックカードに記入する必要はありません。従来、ポロポロになった「館外貸出証」をよく見うけましたが、今後は、そのような「図書館利用票」は使用できなくなりますので、大切に扱ってください。また、折り曲げたものも使用不能となります。

3. 「図書館利用票」は、これまでのように、図書館であずかることはありません。

図書に、「図書館利用票」を添えて貸し出しを申し

出る方法は、これまでと同じですが(開架・閉架とも)、手続き終了後は、図書と一緒に「図書館利用票」もお渡ししますので、必ず受けとってください。

4. 返却の遅れた図書が1冊でもあると、新たな貸し出しを受けることができません。返却後も、遅れた日数分貸出停止が続きます。

3日遅れた人は、返却した日から、3日間貸出停止となります。また、これまででは、貸し出した本には、返却期限日を示していましたが、今後は、それがなくなりますので、ご注意ください。

5. 貸し出しの更新は、3回までとなりました。更新の場合は、必ず図書をお持ちください。

6. 他の利用者が貸し出し中、または製本中の図書を、予約できるようになりました。係員に申し出てください。

7. 返却だけの場合は、カウンター上の、返却カゴに置くだけ……

特に注意していただきたいのは、7の場合。コンピュータでの処理は、利用者が少なくなった時間を使って行いますので、返却と同時に、次の図書を借り出ししたい方は、これまでどおり、係員に返却していただく必要があります。返却、貸し出しの順番が狂うと、冊数オーバーとなって、貸し出しを受けられなくなってしまうおそれがあるからです。

### こんなときはレファレンスの窓口へ!

- ◎図書・雑誌の探し方のわからない時
    - 目録の見方がわからない時
    - 図書・雑誌のある場所がわからない時
    - あるテーマの図書を調べたい時  
(参考図書の使い方などについて)
  - ◎図書館の図書・雑誌をコピーしたい時
  - ◎図書館にない図書・雑誌をみたい時
    - 学外の図書館を利用したい時
    - 学外の図書館からコピーを取り寄せたい時
    - 学外の図書館の図書を借り出ししたい時
- その他わからないことがありましたら、お尋ね下さい。

<b>図書館利用票</b>	
	0123456789
人文学部	
安部利己	
静岡大学附属図書館	

## 基本文献活用のすすめ

復本一郎

新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。大学人の一人として、心よりおよろこび申し上げます。これから4年間、じっくりと腰をすえて、各自が目指す学問と取り組むことによって、知的な面白さを十分に満喫していただきたいと思います。未知の世界に探り足しながら挑戦し、一つ一つ解き明かしていく作業は、本当に楽しいものなので、諸君にも、その楽しさを、是非、味わっていただきたいと思います。その第一段階は、基本文献を、自家葉籠中のものとして自由自在に活用することからはじまります。

そこで、私の専門の国文学（日本文学）に絞って主要な何点かを紹介しますので、一日もはやく、図書館で実物に触れ、そして繙いてみて下さい。いやでも、大学生になった実感が味わえるとともに、諸君の身内から知的興味が沸き上がってくると思います。

基本文献の第一に数えられるのは、厳密に校訂されたテキスト類です。岩波書店の『日本古典文学大系』、小学館の『日本古典文学全集』などは、恰好なテキストです。しかし、これらに収められている作品は、古典の中のごく一部にすぎません。そこで、諸君が求める作品が、どのようなかたちで活字になっているのかを知るには、『国書総目録』（全9巻、岩波書店）を繙くことです。たちどころに解決するでしょう。

次に、テキスト類を正確に読み解くには、各種の辞書類が必要です。『日本国語大辞典』（全20巻、小学館）、『大漢和辞典』（全13巻、大修館）は、必見のものです。それでも解決がつかない場合には、『古事類苑』（全51巻、吉川弘文館）、『広文庫』（全20巻、名著普及会）といった原典をそのまま掲出してある辞典に目を通すことによって解決する場合があります。さらに特殊な事項の解決には、古辞書類を駆使することになるのですが、それらに関しては、諸先生方の講義を通して、少しずつマスターして行って下さい。

『日本古典文学大辞典』（全6巻、岩波書店）、『日本近代文学大事典』（全6巻、講談社）なども、折を見ては繙いてほしいものですし、『国歌大観』をはじめとする各種索引類も是非活用して下さい。

では、また、教室でお目にかかりましょう。

（人文学部・国文学）

## 図書館利用のすすめ

兼平昌昭

新入生諸君、キャンパス・ツアーは済んだでしょうか。静岡大学のキャンパスは日本平山系の一面を占めており、世界最小の国、ヴァチカン市国の総面積とほぼ同じ広さであり、一巡すれば、春の陽気でひと汗かきます。

ヴァチカンは、ローマにある七つの丘の一つにあり、何ひとつとして物を生産する訳ではありません。ただ宗教のみを輸出しているのです。ヴァチカンを有機体に喩えれば、サン・ピエトロ大聖堂は顔、図書館はさしずめブレーンと言ったところでしょう。

そもそも、この図書館の起源は四世紀にまで遡ることが出来ます。そして今日では、世界有数のコレクションを誇っております。中世の叙任権闘争期に教会側の出した文書はここを利用して数多く作られております。

さて、わが大学の図書館についてですが、図書館を中心にして、各学部は、放射状のパターンを形成しています。建物の位置取りから明らかなように、図書館は大学の教育・研究の中枢神経であり、ブレーンとして機能するように構想されております。ヴァチカン図書館の歴史、蔵書数に及びませんが、それでもこのブレーンは毎年数万冊ずつ増殖し続けております。人間のブレーンは使えば、使うほど良くなると言いますが、その為にも、大学のブレーンの提供する資料・情報を有効に利用しない手はないでしょう。

ところで、今年もまた、教職に就いた卒業生からの賀状に、「腰を落ち着けて勉強する暇がない」、「バタバタとびはねて一年が過ぎてしまいました」と言った近況報告が書かれております。

新任の教師は教育の現場で、書物を読んで、知的充電する時間的余裕がなかなかとれないようです。もう少し長く人生のパスペクティブを利かせれば、島崎藤村の言葉が教訓になります。晩年の藤村は、若い時に読んだ本の利子で食べていると述べております。

少なくとも、学生時代に図書館をおおいに利用して、チョーサーに風刺の対象にされないようにしましょうではありませんか。『カンタベリー物語』の中で、彼はパリ大学に遊学した英国人の学生をロバに擬えて風刺しております。ロバはパリで7年間学んだが一言も覚えず、入学した時と同じようにいななき、ついに去って行ったと言うことでした。  
(教育学部・西洋史)

## 私の図書館利用とカミキリムシ

草間 慶一

最近私が図書館で利用している雑誌は、Nature と Research Communication で、時々 Chemical Abstracts も見えています。これらの他に我が家で見取っていない新聞なども読んでいます。

しかし、本学の図書館が出来てこのかた一番利用したのは、趣味で集めている鞘翅目の中のカミキリムシを同定するために関係する文献探しでした。私は中学生の夏(昭和15年)家中で長野県の白骨温泉に行き、そこで沢山のハナカミキリを採集し、カミキリの専門家になりたいと思ったが、父にカミキリは趣味にしろと言われて生化学を専攻したのです。ところが、カミキリへの思い捨てがたく、暇をみつければカミキリを追いかけて日本国内はほとんど踏破し、アメリカ合衆国、ヨーロッパ、エジプト、パプアニューギニア、インド、タイ、中国などにも足をのばしました。

さて、このようにして採集したカミキリの後始末がまた大仕事です。採集したカミキリを標本にして、学名を調べなければ意味がないのです。一般に生物の学名は属名一種名一命名者で出来ております。まずこの命名者を本学図書館にある The National Union Catalog Pre-1956 という700冊以上の図書をたよりに探索し、その中からカミキリの論文と思われる文献を調べたのです。文献が国内にあると思われる場合はそこまで出かけてコピーしました。東京大学、科学博物館、国会図書館とか京都大学の琵琶湖畔にある研究所へもよく行きました。もちろん北海道大学や九州大学にも出かけ、ほとんどの文献に目を通しました。

なにしろ昔は自分の足で文献を探し歩いたものですが、最近では本学でも図書館のレファレンス・サービスを通じて文献の入手が手軽にできるようになりました。国内にない文献でも図書館に頼めば取りよせることもできます。コンピュータ化がすすめばもっと便利になるでしょう。私は本年3月停年退官後もカミキリを追いかけ、また本学図書館も大いに利用したいと考えています。

(理学部・生物学)

## 図書館つき合いの移り変わり

小嶋 睦雄

図書館との最初の出会い、その記憶は定かでない。恐らく小学校の高学年ではなかったか。石木小学校の図書室で伝記ものを中心に読んだ。川棚中学校時代は「チボー家の人々」をはじめ世界の名作を、カタカナに悩まされながら読んだものである。下校途中にある公民館の図書室には足繁く通った。漱石の「心」を読みなさいと勧めてくれた尾崎先生のやさしさが走馬灯の如く駆け巡る。図書室は私の小さな宇宙であり知的好奇心を養成した。学校や公民館は一定の約束事を守ること未知の世界を与えてくれた。木の霊と本の精が見事に調和した空間であった。

高校時代、それは読書し、受験勉強する空間であるとともに、仲間との交歓の場となった。司書の山栄老嬢から、いつも白い目で睨まれた。しかし、本探しの手伝いは快く引き受けてくれたし、貸し出す時には笑顔があった。それほど悲愴感もないニキビ顔の受験生にとって図書室は学問の世界であると同時に、人と人との暖かいふれ合いの空間であった。

大学時代、膨大な蔵書と広い閲覧室に圧倒された。図書室は読書する空間ではなくなった。高度で稀少な専門書の研究空間と化した。レポートをまとめるために、学部の研究室図書を中心に他学部の図書室を利用した。総合大学の利点を最大限活用した。しかし、本部図書館は検索用でしかなかった。かれこれ20年以前の自分史である。

情報源と入手手段が多様化し、経済的に個有化できる現代にあつて、図書館(室)利用もまた変質を余儀なくされよう。図書館(室)の存在理由が厳しく問われる時代である。しかし、図書館(室)の使命が喪失したとは決して思わないし、逆にますます重要になるだろう。とくに、農学部生諸君は、バイオテクノロジーという先端技術と自然・森林環境保全や農林業経営情報処理等の応用技術学の研鑽に努める。実験に明け暮れる学園生活のなかで「書籍」との縁が薄くなる。往々にして「実験」に埋没し、「実験技能」の巧拙に右顧左眄し、研究至上主義に陥り易い。悪魔の囁きに魂を奪われないように図書館(室)の文献等を利用し、心を豊かにして欲しい。

(農学部・林学)

## 「たまに行くなら図書館へ」

吉岡幹夫

日曜日のグルメ番組のひとつに「料理万才」というのがあり、そのなかで「たまに行くならこんな店」というのをやっている。そこで、まずは「たまに行くなら図書館へ」と申し上げておくこととする。

決してふざけているわけではない。学生諸君に語りかけるとき、自分の学生時代を振り返らざるを得ないからである。院生時代は別として、自分が学生時代にどれだけ図書館を利用したかを思い出せば、図書館をどのように利用すべきかなどと書くのは気がひけるのである。休講とくれば、学友たちともども喫茶店にしけこんでいたのだから。休講のときには図書館を利用しようなどとは書けないのである。そこで、「たまに行くなら図書館へ」としたわけである。

しかし、この僕にしろ、ゼミの報告を担当したときとか、ゲルがなくて喫茶店にも行けないときは、図書館の席に座ったものである。そして、そこでしか味わえない味に自己満足したことだけは確かである。

そのことを思い出し、格好つけて言わせてもらえば、「図書館の利用を考えない人は、怠惰であるよりは、図書館の「味」を知らない人である」と申し上げることにしたい。とにかく味わってみるべきである。前記のような番組を見ていてそんな店なら行ってみたいと思う人も多いであろう。直接味わってみたいからである。図書館もそうである。直接自分で味わうに限るのである。

図書館の「味」は、「食」のとは違った頭脳の味であり、知の味であり、心の味である。そして、学生であるがゆえに味わう事のできる独占的味である。まずは、味わって欲しいものである。一つの味わいは、さらに次の味わい方を教えてくれる筈である。楽しみたまえ。

法経短大に学ぶものにとっては、時間的制約のあるのは事実である。しかし、時間をつくるべきものである。法経短大の図書室の利用は年間延べ1,000人(図書室職員注：利用者ももっと多いですぞ！)(吉岡注：すいません)を超えている。一步あゆみを進めて大学図書館の利用を積極的に考えてみようではないか。

それゆえに、まずは、「たまに行くなら図書館へ」である。

(法短・民法)

## 図書館利用の案内

丸山哲郎

工短の学生は、まず第一に、工短1号館のなかの図書室を利用できる。

学期末の試験が近づくと、かなり多くの学生が閲覧室を利用して勉強しているが、不断は利用している学生の数があまり多くない。議義が終わると急いで家へ帰りたい気持ちはわかるが、大学に残って、友達同士で互いに教え合うことも、もっとあってもよいのではないだろうか。必要な学習参考書は書庫にかなりあるし、買ってほしい本があったら、その希望を出せるようになっている。

1号館内の書庫にある図書は、工学の専門のものから、数学、物理学のような基礎的なもの、さらには文学や歴史のような一般教養の範囲のものまで、広範囲にわたって、数も多く揃えてあるので、どしどし積極的に利用してほしい。時間も、現在は午後9時まで開いているが、9時半まで開くことも検討されている。

第二に、工学部の浜松分館も利用できるので、こちらも大いに利用してほしい。土曜日は5時に閉じるが、月曜から金曜までは午後8時まで開いているので、休講のさい、あるいは講義の間に、遠慮なく利用されるよう期待している。

短大の図書室にない本や雑誌でも、分館にあることもある。また短大の閲覧室がせまく、学生でいっぱいになっている時など、自習用に分館を利用することもできる。

いずれにせよ、工短の学生の分館利用がもっと広がることを期待している。地理的に離れているので、利用し難い面もあるかとは思いますが、離れているといっても、工短1号館から高々50mの距離だ。おっくうがらずに、もっと積極的に利用するとよいと思う。

(工短・数学)

## 浜松分館に関口壮吉先生の 胸像を設置して 新井智一

工学部、工業短期大学部及びその前身である浜松工業専門学校、浜松高等工業学校の卒業生で組織しています浜松工業会では、従来から学部内の施設や環境の整備に援助をしてくれています。浜松分館の建設に際しても、創立50周年記念事業の一環として、書庫及び調度品などの購入に多額の寄付をしました。

浜松工業会では昭和60年6月1日に60周年記念式典を行いました。その際電子式テレビジョンの研究で文化勲章を受章された高柳健次郎先生（浜松高工当時の教授）の功績をたたえて、正門横に高柳先生の胸像を建設しました。

これを契機に、卒業生次の古い卒業生から浜松高等工業学校の初代校長であった関口壮吉先生の胸像を建設してほしいとの要望が多数浜松工業会に寄せられました。浜松工業会ではこれを受けて、会員からの募金によって関口先生の胸像を建設することになりました。と申しますのは、関口先生は以下のような事績を成し遂げられた立派な校長であったからです。

関口先生が校長として説かれた理想は、学生各個人の人格、能力を最高限度まで伸ばし、時代に先行するということであり、内面的には真に心と心の触れ合う教育でした。その手段として「自由啓発」「仁愛」を校訓とされました。すなわち、これ

まで行われていた命令的一律的な方法をやめ、罰則や落第でおどかす規則を廃止し、大自然の精神たる仁愛をもって校風の基礎とし、情愛にみちた、誠実な、自発的な、そして個性を尊重する教育法をとられました。

他方、教授や助教授に対しては、創造的な研究をすることを奨励されました。大学を卒業してまもない高柳先生を採用し、空想的ともいえるテレビジョンの研究に理解と支援を惜みませんでした。このことがなければ高柳先生の今日があったかどうかわかりません。

学校も社会も創立当時とは大きな変革をしていますが、関口校長の提唱実践した「自由啓発」の精神は長く受け継がれてきました。

浜松分館の出入りに、関口先生の胸像を迎え見て、先輩達が受けた教育の原点に想いを走らせてほしいものです。

(工学部教授・浜松工業会理事長)

### お知らせ (本館)

#### ◎春期休業中の長期貸出

貸出冊数：5冊

貸出開始：昭和61年2月9日(月)から

返却期間：昭和61年4月20日(月)

なお、卒業見込者及び工学部3年進級見込者には長期貸出はいたしません。

#### ◎開館時間の変更

3月21日(土)から4月10日(木)までの間は、平日は午後5時、土曜日は正午で閉館いたします。

～ 新入生のための図書館利用案内のお知らせ ～

### ライブラリー・オリエンテーション

期 間： 4月13日(月)～4月17日(金)

第1部： 図書館および資料の案内と利用法の説明（ビデオによる繰り返し放映）

時 間： 午前10:00～午後4:00（除く12:00～13:00）

所要時間： 1回20分

場 所： 喫煙コーナー（4階閲覧室入口右側）

第2部： 書庫内案内

時 間： 第1回 午後1:30～ 第2回 午後3:30～

所要時間： 毎回20～30分

集合場所： 喫煙コーナー（4階閲覧室入口右側）